

公開講演会
二本角が表すもの—
西アジアにおけるアレクサンドロス大王の神聖化

日 時:2005年12月17日(土) 14:00-16:00
会 場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂
講 師:山中由里子(国立民族学博物館民族文化研究部助手)
司 会:中田 考(同志社大学大学院神学研究科教授)
共 催:一神教学際研究センター、日本オリエント学会

講演要旨

アレクサンドロスに関する言説は歴史や物語というジャンルだけにとどまらず、また象徴されるものも多様である。まさにアレクサンドロスは「千の顔を持つ英雄」であるといえる。そして、その顔の一つは宗教と深い関係がある。

今回の講演では、『コーラン』第18章「洞窟」82-97節に登場する二本角(ズー・ル=カルナイン)とアレクサンドロス伝承との関連やこの二本角の啓示が下された経緯と、タバリーの『タフシール』、サアラビーの『預言者伝集』、そしてニザーミーのアレクサンドロス物語を例としてイスラーム世界におけるアレクサンドロスの神聖化について焦点が当てられた。最後に日本と中国に伝わったイメージも取り上げられた。

アラビア語・ペルシア語の文献ではアレクサンドロスは「二本角のアレクサンドロス(アル=イस्कन्दール・ズー・ル=カルナイン)」としてしばしば表れる。これは『コーラン』の「洞窟」章82-97節に登場する二本角(ズー・ル=カルナイン)に由来する。これはアッラーがムハンマドに「みな」が二本角について質問して来た時の答えについて語る一節である。二本角が誰であるか、なぜ二本角と呼ばれるのかについての記述はなく、長い間論争的となっていた。現在、この一節がシリア語のアレクサンドロスに関するキリスト教伝承に拠っているというネルデケによる推論が最も有力とされている。

イスラーム以前にすでにユダヤ・キリスト教において、アレクサンドロスは神聖な地位を得ていた。ユダヤ教徒は神の国を地上にもたらすメシアとしてみなし、キリスト教ではイエス・キリストの先駆者としてみなした。イスラームはこのようにすでに神聖化されたアレクサンドロスを自らの宗教の擁護者、布教者、預言者の二本角として受け入れたのである。

タバリーの『タフシール』ではユダヤ・キリスト教の伝承の影響が多く見られるが、比較すると神の使徒としての役割が強調されており、歴史的地理的な記述はなく、寓意的な意味合いが強い。また、サアラビーの『預言者伝集』では歴史書からの引用を含み、誕生から死までの一貫したアレクサンドロス伝となっている。それゆえ、訓戒的な要素を持つ。一方、ニザーミーのアレクサンドロス物語は3部構成になっており、布教者としての征服者、哲人王、そして預言者として表される。最後には人間の限界を教訓的に示す。ニザーミーは様々なアレクサンドロス伝を元としながらイスラーム的英雄として描いている。

イスラームとユダヤ・キリスト教と大きく異なる点は、イスラームがアレクサンドロスの征服地域と大部分を同じくした地域の支配者であったということである。そのためカリフ達の現実のモデルとなりえた。聖戦と当てはまる戦闘的な側面と信者共同体を外的から護る守護者としての側面が表れている。このような二本角のアレクサンドロスではあるが、彼の野心はイスラームにおいても教訓の対象となった。しかしながら、彼の昇天についてのエピソードによると中世ヨーロッパのキリスト教神学者ほど批判的ではなかったように思われる。

『コーラン』の二本角についてはアレクサンドロスにまつわる歴史的な文脈は書かれてはいないが、『コーラン』以降の宗教文学においても、歴史叙述においても、文学作品においても、聖別された二本角と歴史的な人物であるアレクサンドロスは常に密接な関係にあったのである。

(CISMORリサーチアシスタント・神学研究科博士後期課程 細谷歩美)

プログラム

1. あいさつ:前田 徹(日本オリエント学会常務理事)
2. 講演:山中由里子
3. 質疑応答

二本角が表すもの——西アジアにおける アレクサンドロス大王の神聖化

国立民族学博物館民族文化研究部助手
山中由里子



アレクサンドロス大王が、紀元前323年に33歳の若さで死ぬまでにエジプトからインダス河領域まで広大な土地を征服したことは、皆さんもよくご存じだと思います。アレクサンドロス大王という何を思い浮かべられますでしょうか。アレクサンドロスと言えば、天才的な武人、世界征服の野望を持った男、東西文明交流の道をつくった男、シルクロード、ヘレニズム文化などを思い浮かべられるかもしれません。空に飛んで昇っていくという話、ゴグとマゴグの話も出てきます。私は歴史上の人物の中で、これほど後世に広く多くの伝説を残した人間はいないのではないかと思います。

世界中にアレクサンドロスを主人公とした伝説、物語が伝わっています。世界中のいろいろな時代の人々が、それぞれにアレクサンドロスに何らかの象徴、寓意を見いだそうとしてきました。それは野望であったり、征服欲であったり、好奇心、探究心、異文化に対する寛容、東西の融合、人間の限界などです。私はイスラームの勃興からモンゴル侵攻までの時代、日本で言えば古墳時代末期から鎌倉時代はじめ頃の時代におけるアラビア語、ペルシア語文献の中で、アレクサンドロスがどのように描かれていたかという研究をしております。一神教学際研究センターでのお話ということで、今日は特にアレクサンドロスが持つ宗教的な象徴性についてお話をしたいと思います。イスラーム教徒の人々がアレクサンドロスに何を見たか。アレクサンドロスについて何を語ったかを具体的なテキストを見ながら考察したいと思います。

出発点になるのが『コーラン』第18章「洞窟」82～97節です。そこに、二本角を持った男、アラビア語ではズー・ル＝カルナインが登場します。『コーラン』の一節を読ませていただきます。

「また皆が汝に二本角のことで質問をしてくるだろう。言ってみよう。ではお前らに彼の話を一つ語って聞かせよう」。これは『コーラン』の啓示なのですが、神様がムハンマドに語っている言葉です。「皆がお前にこういう質問をしにくるだろうから、こう答えればよい」と教えてあげているわけです。皆というのは誰のことを指しているか、あとでお話いたします。「そもそも我らは彼の権能を地上に打ち立て、かつこれにかなることも意のままになしうる手だてを授けたが、彼はある一つの道を取り、遂に日の没するところにたどりついた。見ると日の沈むのは泥の泉で、そこに一群の人々が住んでいるのに出会った。我らが『これ、二本角よ、お前、この子どもを懲らしめるか、それとも優しくしてやるか』と言えば、彼が言うことに『不義なす者はまず我らが懲らしを加えておいて、次に主のお手もつれていかれ、改めて、いやというほど懲らしめられるということになりましょう。しかし信仰深く善行に勤む者は、この上もない見事なご褒美をいただいた上、我らとしても、ごく楽な仕事を命じてやることになりましょう』。それからまた彼は一つの道を取り、遂に日の昇るところにたどりついた。見ると日の昇る国の住民は日覆いというものを全然持たぬ人々であった。とまあ、こんな具合であった。彼にどれくらい勢力があったかということとは我ら、アッラーのみだけが完全に知っていた。

(中略)。それから彼は一つの道を取り、今度は北の果てに向かう一つの道を取り、遂に聳え立つ二峰の間にたどりついた。見ればその手前にある民族が住んでいて、これは言葉をほとんど解さない。この子どもが言うことに『おう、二本角様、ヤーजूージュとマージュージュが我が国を荒して困ります。あなた様に貢ぎ物を差し上げますゆえ、なんとか彼らと私どもの間に防壁をつくっていただけませぬか』と。『主に賜った我が勢力の方が、お前方の貢ぎ物などよりどんなにありがたいことか、まあとにかくお前たち、精出してわしに手伝ってくれ。お前方と彼らとの間に防壁をつくってやるから。どんどん鉄の固まりを運んでくるがよい』と彼は言い、やがて両方の絶壁が平らになった頃を見はからい、『それ吹け』と声をかければ、それはたちまち火と燃える。そこで今度は『どろどろに溶けた銅を持ってくるがよい。あそこへぶちまけるから』と言う。『もうこうなってはさすがの彼ら(ヤーजूージュとマージュージュのこと)も乗り越すことはできぬ。穴を開けることもできぬ。これは皆、神様のお情けであるぞ。だがいよいよ神様のお約束が果たされる時(最後の審判の時)が来れば、この防壁も叩きつぶされてしまうであろう。神様のお約束は必ず実現するから』と彼は言った。これが『コーラン』第18章にある二本角に関する啓示です。

「皆が、尋ねに来るであろう」という皆は誰なのか。一体どういう経緯で啓示が下ったのかということをご説明しますと、この啓示が下された経緯は、タバリという学者が書いた『コーラン』注釈書に二つの伝承が載っています。二本角の啓示がどういうコンテキストで下されたかが書いてあります。一つの伝承はウクバ・イブン・アーミルという人に遡るハディース(伝承)です。ウクバはムハンマドと一緒に戦ってきた人で、後にエジプト総督になった人です。ウクバは自分がムハンマドに仕えていた時の話としてこう語っています。

「ある日、私がムハンマドに仕えていた時のこと。あの方の家から出たところで何人かの「啓典の民」

の人々に出会った。その者たちが言うには『我らが預言者に尋ねたいことがある。家に上げてもらえぬか』。私は家に入り、このことをムハンマドに知らせた。ムハンマドが言うには『私と彼らは何の関係があるというのだ。私にはアッラーが教えたもうた知識以外には何も無い。水を汲んで清めをしてくれ』と言ってムハンマドは礼拝をされた。それが済むや否や、お顔に喜びの表情が浮かぶのを私は見た。そして『彼らの中へ通しなさい。わが教友と見なしたものは誰でも入れてやりなさい』とムハンマドは言われました。彼の者たちは中へ入り、あの御方の前に立った。あの御方は言われた。『お前方は、お前方の書物に書かれていることを私に尋ね、私が答えることを望んでおられる。もしそうお望みならば答えてしんぜよう』。彼らは『まさにその通り。お答えください』と言った。あの御方は言われた。『二本角についてお前方の書物に何が書かれているか尋ねにきたのであろう』。

「啓典の民」というのは『コーラン』の中では真の神の啓示した教えの信者のことで、ユダヤ教徒、キリスト教徒、サービア教徒とされています。ここで出てくる啓典の民というのはムハンマドの宗教活動に対立していたユダヤ教徒のことだと考えられます。ムハンマドの預言に彼らは疑いを持っているわけです。ユダヤ教徒たちはムハンマドを訝しく思っているわけです。ユダヤ教徒たちはムハンマドが本当に預言者なのかを試しに来たわけです。しかし神様はそういうやつらが来て、こういう質問をしにくるであろうとわかっているのだから、ムハンマドに啓示を下して「こいつらが来たら、こう答えなさい」と教えてあげる。「礼拝を済ませるや否や、ムハンマドの顔に喜びの表情が浮かんだ」というのは、その瞬間に訪問者たちの問いに対する神の啓示が下ったことを示唆しています。この伝承によりますと、ムハンマドは啓典の民がムハンマドに問いかけてくる以前に、すでに彼らの質問も、それに対する答えも神によって知らされていたこととなります。

タバリーの『コーラン』注釈書には、イブン・アッパースという619年から68年、あるいは688年に生きた、『コーラン』解釈学において大きな権威を持っていた人に遡るもう一つの伝承があります。それによると、もともとメッカにいた多神教徒のクライシュ族という人々が、ムハンマドの預言者としての活動を訝しく思い、だんだん力を持ってくるムハンマドに対して危惧を懐く。多神教徒が「こいつら危険人物だ」ということで、ユダヤ教徒の学者たちのところに行って「どうやったら本当の預言者か調べることができるでしょうか」と意見を請いにくる。そういう内容が書かれています。

「彼ら、クライシュ族の代表者二人は預言者、ムハンマドについてユダヤ教識者に尋ね、彼の行動や言説の一部について説明した。彼らは言った。『あなた方こそ、啓典の民です。我々はあなた方に我々の同胞について知らせてきたのです』。彼らがこう言うと、ユダヤの博士たちはこのように言った。『その者にこれから教える三つの質問をしなされ。もし答えることができたなら、その者は神に遣わされた預言者じゃろう。答えられなければ、そやつは嘘つきじゃ。自ら、ごろうじよ。太古に姿を消した若者たちについて尋ねられよ。彼らのことについて、また彼らにまつわる不思議な物語は何であったのか。それから地の東の果てと西の果てまで達した彷徨う男について何を知っているか尋ねよ。最後に我らの霊について問うてみられよ。もし答えることができたなら、その者はまさに預言者であるゆえ、彼の教えを奉じよ。もし答えられなければ嘘つきであるゆえ、そやつについてお前方が望むように何とでもするがよい』」。

クライシュ族の二人はメッカに戻りました。ムハンマドを試すために、ユダヤ教徒たちが教えてくれたクイズ、謎、三つの質問をムハンマドに投げかけます。ムハンマドは同じ伝承の中で「明日、答えるよ」と約束しますが、「もしアッラーの御心ならば」と付け加えることを忘れてしまうんです。そのために約

束の日が過ぎてもなかなか神の啓示が下りません。15日目によく天使ガブリエルが来て「あんた、『もしアッラーの御心ならば』というのを忘れただろう、だめだよ」と、まず注意しておいてから啓示の内容、『コーラン』18章にある内容の啓示を下します。東と西を彷徨う男に関する二つ目の質問が二本角に関する質問です。他の『コーラン』の中に触れられている「7人の眠り人」と霊のことなどで、『コーラン』の中に啓示があります。

今のタバリーの『コーラン』注釈書に上げられている二つの伝承は、二つとも二本角に関する天啓が示された経緯です。アラビア語で、アスパーブ・アン＝ヌズールと言います。二つの説明には明らかに食い違いがあります。最初の伝承ではメッカの多神教徒ではなく、啓典の民が自分たちの書物に記されていることについて直接尋ねてきたことになっています。ムハンマドはその場で即答したように伝えられています。最初に上げた伝承は、ムハンマドに接していた教友ウクバの証言という点で、イスラーム伝承学においては特に尊重されますが、すべての教友の言が事実を語っているとも言えません。もう一つの方はイブン・アッパースという権威のある初期の伝承学者の説です。どちらに、より信憑性があるか、私は伝承学の専門ではないので専門家に任せることにして、二本角に関する『コーラン』の一節の背景には預言者としてのムハンマドの威信を失墜させようという多神教徒、ユダヤ教徒の試みがあったということが、これらの伝承からわかります。

啓示の内容に戻りますが、二本角に関して問いかけられた時にはこういうふうに答えなさいという神の啓示によると「二本角とは神によって権能を地上に打ち立てられ、地上を支配する力を与えられ、いかなることでも意のままになしうる手だてを授けられた人物」とされています。『コーラン』のテキスト自体は、どこの国の人であったかという特定はしておらず、また二本角という不思議な名前の由来も意味も明らかにはしていません。二本角は三つの

道をとります。まずは日の没するところ。つまり西の果てに行き、次に日の昇るところ、東の果てに達します。これらの地で彼は神から与えられた力を持って不義なすものを懲らしめ、信仰深く善行に勤む者には、ごく楽な仕事を命じてやる。最後にたどりつくのが聳え立つ二つの山の間。北方にあるというのは解釈学者たちの間の有力な説ですが、『コーラン』自体には「もう一つの道をとった」としか書いてありません。そこで出会った民に嘆願され、二本角は彼らを脅かすヤーजूージュとマージュージュという野蛮な民族を奉じ込めるために山の間には巨大なダム、壁を建設します。

このヤーजूージュとマージュージュという名前の民族は聖書にも登場するゴグとマゴグのことです。聖書では「創世記」10章「エゼキエル書」38章、「ヨハネの黙示録」20章に出てきます。ゴグとマゴグは文明世界を脅かす北方の伝説的な蛮人で、トルコ民族のこととか、タタール人のこととか、モンゴル人のこととかいろんな説が言われてきます。ゴグとマゴグ伝説の形成自体は詳しく触れませんが、伝播の過程で「アレクサンドロス物語」というものの中に採り入れられます。アレクサンドロス物語の原型は、紀元後3世紀くらいまでにエジプトのアレクサンドリアでギリシャ語によって編纂された、アレクサンドロスを主人公とした空想的な遠征物語です。その後、世界各国にいろいろな形で伝播します。アレクサンドロス物語の一部のバージョン、ことにユダヤ色の強い、ガンマ系と言われているバージョンは「アレクサンドロスがゴグとマゴグの侵略から文明世界を守るために山の間には堰を建設する」という話が重要なエピソードの一つとなっています。つまりイスラーム以前からゴグとマゴグ伝説とアレクサンドロス物語が融合していたことから考えても、ヤーजूージュとマージュージュを封じ込める『コーラン』の二本角の話にアレクサンドロス伝承が関連していることは明白であるようにみえます。しかし『コーラン』の一節にはアレクサンドロスという名前は登場しません。

二本角というのは誰か。二本角の正体とは何か。『コーラン』第18章に登場する二本角が誰で、どうして二本角という名前と呼ばれているのか。これは、イスラーム初期の識者の中で論争の的になってきました。二本角は誰かという質問に対して、いろいろな伝承、説が唱えられ、議論の経緯もややこしいのですが、簡単にまとめると三つの説があります。一つは二本角とはアレクサンドロスのことである。もう一つは古代イエメンの王様のサアブのことである。また一つはイランの伝説的な王様、ファリードゥーンである。この人はアブラハムと同時代の人であると言われていた伝説的な王様です。二本角はアブラハムと同世代の人のはずなので、このような説があります。大きく分けてこの三つの説がイスラーム初期から学者たちの間で言われてきました。その中でも有力だったのが、二本角はアレクサンドロスであるという説です。アレクサンドロス説を唱えるもとなる伝承が、タバリーの『コーラン』注釈書に出てくるウクバ・イブン・アミールの証言の続きにあります。

「ムハンマドは二本角について尋ねにきた啓典の民に対して、彼はルームの若者（ルームはギリシャ、ローマのこと）で、エジプトに来てアレクサンドリアの町を建てた」。アレクサンドロスという名前自体はここには出てきませんが、ルームの若者、つまりギリシャの若者でアレクサンドリアを建設したと言えばアレクサンドロス以外には考えられません。タバリーの『タフシール』（『コーラン』注釈書）の中に入っているもう一つの二本角を最も明確にアレクサンドロスと同一視しているのは、ワフブ・イブン・ムナッビフという伝承学者に遡るものです。古人の物語についての知識を持っていたイエメン人のワフブ・イブン・ムナッビフによると「二本角はルーム人で、ある老婆の一人息子であった。その者の名前はアル・イस्कन्दルと言ったが、二本角と呼ばれた所以は頭の両側が銅でできていたからである」。アル・イस्कन्दルというのはアレクサンドロスのことですが、この名前が直接言及されているのは、タバリ

ーが上げている多くの伝承の中でもこの一節だけです。ここでは二本角は王ではなく、ある老婆の一人息子、ルーム人となっています。二本角と呼ばれた所以は頭の両側が銅できていたからだ。この奇妙な説明はタバリーの他の箇所にも上げられています。この一節の後には二本角と神様の対話、地の果ての諸民族との聖戦、ゴグとマゴグの防壁の建設と話が続くのですが、続きの部分に関しては後で採り上げます。

「二本角」という不思議な名前の由来について、頭の両側か銅できていたという他にもいろいろな説明がされました。12世紀の有名な神学者でラーギーという人の『コーラン』注釈書において二本角の名前の由来に関するそれまでの時代の説明がまとめられています。そのうちおそらく広く受け入れられていたと思われるのが一番の説です。「太陽の二つの角、日が昇るところと日が沈むところまで達したから」という、アラビア語はカルンは「太陽の光」、明け方の最初に表れる光線も意味します。二本角が日の没するところから日の昇るところまでたどりついたという『コーラン』の説と、カルンの二重の意味を利用した説明です。二番目は、イランの伝説、伝承に基づいたものですが、二本角とアレクサンドロスが同一であるという前提に基づいた説です。アレクサンドロスが二本角と呼ばれるのはペルシャ人とギリシャ人の二つの血統を引いているからというものです。イラン系のアレクサンドロス物語では、アレクサンドロスはペルシャの王様のダレイオスとギリシャの王様の娘の間にできた子どもであって、半分ペルシャ人だったという伝説があります。ペルシャ人とギリシャ人だったから二本の角なのだという説明もされました。

もう一つ注目したいのが7番「彼の王冠に角がついていたから」。11番「その勇気が敵に角を突く牡羊のようだったから」。7の冠についた角というのはヘレニズム時代のリュシマコスやプトレマイオスといった、アレクサンドロスの後継者たちが鑄造した貨

幣に彫られている雄羊の角をつけたディアデム(冠)を被ったアレクサンドロスの肖像を思わせませす。フランス国立図書館の貨幣部門に所蔵されているルイ14世のコレクションのカメオがありますが、紀元前4世紀末に作られたもので、製作者と考えられているピュルゴテレスはアレクサンドロスが唯一「お前は私の肖像をつくっていい」と許可されていた彫刻家です。アレクサンドロスの横顔がカメオに掘られていまして、角はゼウス・アモン神を象徴していると言われています。もっとよく知られているのが、アレクサンドロスの顔が入っている貨幣、後継者の一人のリュシマコスの4ドラコム銀貨やプトレマイオスの4ドラコム銀貨です。リュシマコスの方はカメオを模倣していると思いますが、ディアデム(冠)に雄羊の角がついています。プトレマイオスの方はインドも制覇したアレクサンドロスのことで、インド象の角の冠がついています。東京国立博物館でアレクサンドロス大王東西文明交流の展覧会が開催されましたが、そこに展示されていたペラ(アレクサンドロスのマケドニアの故郷)で出土したパン(牧神)の姿のアレクサンドロス像は、山羊の角が生えているものです。ヘレニズム時代の美術品に角を冠したアレクサンドロス像があり、この図像が二本角の名称のもとになっているという説もあるのですが、確固たる文献的な証拠はありません。

11番の「その勇気が敵に角を突く雄羊のようだったから」という解釈も雄羊の角をつけた肖像との関連が考えられます。雄羊の角はアレクサンドロス自らが、その子であると称して崇めたゼウス・アモン神の象徴物でした。エジプトの奥地にあるオアシスにゼウス・アモン神殿がありますが、そこを遠征の途中にわざわざ寄り道をして神殿の神託所を訪れた時、アモン神に「お前はわしの子だ」と神託を告げられたと言われている伝説があります。これは生存中にアレクサンドロス自身が実際にそう聞いたと主張していたことです。自分で冠を被って「私はアモン神の息子なのだ」と。晩餐の時、雄羊の角をつけたアモ

ン神を装ったり、彫刻家たちに角をつけた肖像を彫らせたりしたという記録があります。アレクサンドロスとゼウス・アモン神の角とのかかわりに直接言及しているイスラーム世界の著作はありません。アラブの学者による、アレクサンドロスに角が生えているコインが出土したという記述は私の知る限りないので、証明はまだされていません。初期のカリフにはアレクサンドロスに対する考古学的な興味がかなりあったようで、アレクサンドロスにまつわる遺跡をカリフが掘らせていたということも歴史書に残っていますので、皆、知っていたのかもしれませんが。

雄羊の角ともう一つ関連が考えられるのは、旧約聖書「ダニエル書」第8章の預言と『コーラン』の二本角との関係です。「ダニエル書」には二本角の雄羊が一本角の山羊によって打ち倒されるという預言を見たダニエルに対して、天使ガブリエルが「この二本角の雄羊はメディアとペルシャの王様であり、荒々しい山羊はギリシャの王である」と説明しています。そもそもムハンマドを試すためにユダヤ教徒たちが自分たちの書物の中からいくつかの質問を用意したことが伝承に入っていました。これが事実であったとすると、ユダヤ教徒たちが参照したのは旧約聖書「ダニエル書」の一部であったのではないかと推察できます。この点において「ダニエル書」のヘブライ語テキストで使われているヘブライ語のローケ・ラーナーイム、二本角を持っているという意味ですが、そのヘブライ語とアラビア語のズール＝カルナインという言葉が似ていることは意義深いことです。しかし『コーラン』の二本角と旧約聖書「ダニエル書」の二本角の雄羊はぴったりと合うわけではありません。イスラーム教徒の識者の多くは『コーラン』の二本角がアレクサンドロスであるとしていますが、「ダニエル書」の預言の解釈においてユダヤ教徒たちは「一角の山羊がギリシャの王様である」と天使ガブリエルが説明したということで、二本角の雄羊ではなく、一角の山羊の方がアレクサンドロスだと見ています。それに、「ダニエル書」の二本角はゴグとマゴグ

の伝説とは関係ありません。

一神教とアレクサンドロスの関係についてお話します。二本角の正体の謎はいろいろな説明が試みられるにしたがって、いよいよ複雑になります。イスラームの識者たち、学者たちは決定的な回答を得ることができず、その後も19世紀の西洋と東洋学者たちも引き続きこの論議をして、二本角の正体についてさまざまな意見を交わしてきました。「ダニエルの書」やユダヤ教徒のメシア思考、救世主思考との関連性においての説明も試みられました。様々な論文のやりとりがありましたが、論戦に終止符を打ったのは、1890年に発表されたテオドール・ネルデケというドイツの東洋学者の「アレクサンドロス物語の歴史に関する論考」です。ネルデケはこの論文において『『コーラン』の二本角の一節は、シリア語のアレクサンドロスに関するキリスト教伝承によっている」と推論しました。『コーラン』の洞窟の章、二本角のことが載っているものは、そもそもキリスト教の説話に題をとった啓示が多いのですが、ネルデケはそこに含まれている二本角の一節もキリスト教徒が翻訳したアレクサンドロスにまつわる伝説に基づいているということを文献学的に証明しました。後にライニンクというオランダ学者がネルデケの時代設定を修正しました。ライニンクは「シリア語のアレクサンドロス伝説は紀元628年～637年の間に成立したものだろう」と言いました。この時代はどういう時代か。歴史的なコンテキストを言いますと、当時、ビザンチン皇帝のヘラクレイオス1世がササン朝と戦っていました。ビザンチン皇帝ヘラクレイオス1世の対ササン朝ペルシャのプロパガンダと結びついていたのではないかとされています。シリア語の伝説の中のアレクサンドロスのペルシャ王に対する勝利、皇帝ヘラクレイオスが628年、ペルシャ軍に徹底的な打撃を与えてシリア、エジプトを奪回したという勝利を暗示していると言われています。

シリア語伝説と『コーラン』の二本角との類似点だけ上げます。まず、アレクサンドロスが世の果て

へ遠征すること、太陽が天の窓に入るところ、つまり西から北へ向かうこと、日の昇るところに住む人々の描写が似ている。ゴグとマゴグなどを含むフン族を封じ込める鉄と銅の堰、関門の壁を建設する一節があること。終末の時、最後の審判の時にはその堰が破られるだろうという預言があること。これらの点において『コーラン』の二本角と類似しているわけです。『コーラン』の一節がこれに基づいているのではないかという決定的な証拠となったのは、次の2節です。シリア語のアレクサンドロスにまつわるキリスト教伝説の中にある実際の文章ですが、その最初の2節です。この伝説の中でアレクサンドロスがアレクサンドリアを出発する際に神に祈りを捧げます。その時にこういふに言います。

「神よ、諸王と諸士師の主よ、我は知る、御身が我を他のすべての王の頂点に立たせ、我が頭に二本の角を生やしたもうたことを。それをもって万国をつき抑えるように。どうか天空よりお力をお授けくださるよう。世界中の国々に勝る力を得て、それらを罰することができるよう、我は御身の名を永遠に賛美し、御身の記憶は不屈のものとなるであろう。我が国の憲章に神の名を記せば御身にとって永久の記録となるであろう」。ここに2本の角を生やしたもうた、とアレクサンドロスが神様に祈りの中で言うわけです。

別の箇所にもアレクサンドロスがペルシャの王様と戦う前、前の晩、寝ているアレクサンドロスの前に神様が現れて、こう言う場面があります。

「見よ、我は汝にあらゆる国々に勝る力を与え、鉄の角を2本、汝の頭に生やした。汝がこの世の国々をつき抑えるように。(中略)だが見よ、大勢の王とその軍が汝を討つためにやってくる。我が名を呼ぶがよい。汝の助けに参ろうぞ」。

この二つの節にあるように、アレクサンドロスにまつわるシリア語の伝説ではこの世の国々をつき抑えられるようアレクサンドロスが神様から授かった力が2本の角に象徴されています。それが『コーラン』

ではアッラーが「権能を地上に打ち立て、かつこれにかなることでもなしうる手だてを授けた者の名前」、二本角となっているということです。

『コーラン』の二本角説話の内容はキリスト教伝説に似たアレクサンドロス伝承からとられたものであったことは疑いないとしても、いろいろと疑問は残ります。すでにタバリーの『コーラン』注釈書に記されている伝承が事実だとすると、そもそもムハンマドに二本角について尋ねにきたのはキリスト教徒ではなく、ユダヤ教徒だったと思われます。文献学的には『コーラン』の二本角が、シリア語のキリスト教伝説に基づいているというネルデケの説は正しいのかもしれませんが、ムハンマドが、正しく言えば神様が、二本角の話を啓示として伝えたという政治的な背景を十分に説明していません。なぜユダヤ教徒たちは二本角についてムハンマドに尋ねにきたのか。ムハンマドがこの人物に語ることによって、正確に言うと神様が、ムハンマドにこれを語らせることによって、ユダヤ教徒たちに何を訴えようとしたのでしょうか。二本角という名称自体はユダヤ教徒の救世主的文学に古くからあります。またユダヤ化されたアレクサンドロス伝説、アレクサンドロス物語もヘレニズム時代からすでにあったことは確かです。でも二本角とアレクサンドロス伝説を具体的に結びつけているのは、現存する文献の中ではシリア語キリスト教伝説が最も早い例のようです。キリスト教シリア伝説がユダヤ教伝承の影響を受けている可能性も考えられますが、どちらかが一方に影響を与えたというのではないかもしれません。7世紀中頃といえば、東ローマ帝国、ビザンチン帝国があり、ササン朝ペルシャがあり、そこにムハンマドがのし上がってきたという、三つ巴の戦いがあった動乱の時期です。この動乱の時期にキリスト教徒もユダヤ教徒もアレクサンドロスを救世主とする同じような伝承を共有して、それぞれが都合のよい筋書きの中に折り込んでいたのではないかと考えるのがよいかもしれません。

そもそもなぜ、アレクサンドロスが一神教においてこれほど神聖な地位を得られたのかという点について触れますと、アレクサンドロスの神格化の芽はすでに彼の生前からありました。ゼウス・アモン神の恰好をしていたことはすでに述べましたが、ヘレニズム時代にはアレクサンドリアに建てられた彼の墓を中心とした、アレクサンドロス崇拜にまで発展しました。アレクサンドロス物語の原型に近いとされるアルファ系では、アレクサンドリアにおける大王崇拜を反映した一節があります。セラピス神という神様がアレクサンドロスの夢の中に現れて、彼の運命とアレクサンドリアの将来について語る預言があります。その預言の中でセラピスは「アレクサンドロスは野蛮な国々の民族を征服した後、死にながら死なずにアレクサンドリアに戻り、そこで神として崇められるようになる」と告げています。

その他、古代ギリシャの「預言文学」においてもアレクサンドロスはペルシャ帝国を滅ぼし、ギリシャ文明に勝利をもたらす英雄として描かれています。ヘレニズム時代にアレクサンドロスの神格化の芽はあって、それがローマになると、ローマの皇帝崇拜の原型になるわけです。ローマの皇帝たちには自らをアレクサンドロスになぞらえたいという願望がありました。我こそはアレクサンドロスなり、という恰好をしたり、アレクサンドロスがしたことと同じことをしてみたり、というアレクサンドロス模倣が流行りました。その一つの例がポンペイウスがアレクサンドロスを真似したヘアスタイルをして、虚ろな眼差しで見ている。小太りなポンペイウスには滑稽かなという見立てですが、ローマ時代の皇帝崇拜に発展していきました。一神教がアレクサンドロスを神聖視したことは、その延長線上にあったのではないかと考えられます。

一神教では神様は一つですから、アレクサンドロスを神様とするわけにはいきません。アレクサンドロス自身に神の格式を与えることは拒んだわけで、神格化を拒否します。しかしすでにアレクサンドロス崇拜の伝統があって、一神教もそれを採り入れ

たいわけです。神様にはできないけれども、神の敬虔な信徒にし、彼らの宗教の擁護者となりました。キリスト教徒によるアレクサンドロス伝説の形成はコンスタンチヌスのキリスト教公認と東ローマ帝国の建国とも大きくかかわっているのではないかと推察できます。このような東ローマ帝国のアレクサンドロスとの予表論的な結びつきは、キリスト教帝国の危機においても再び強調されます。

アレクサンドロスにまつわるシリア語のキリスト教伝説が皇帝ヘラクレイオスとササン朝ペルシャとの長年の抗争を背景に成り立った作品であること。シリア語キリスト教伝説は、皇帝がペルシャ軍を打ち負かしたことを、アレクサンドロスの勝利に重ねて描いていると言いましたが、その後、ビザンチン皇帝は衰弱した軍を建て直す間もなく、ヘラクレイオスは今度はアラブ・ムスリムの脅威と対峙することになります。ムハンマドの死は632年ですが、ムハンマドの死後も決河の勢いで突き進むムスリム軍にヤルムークの戦いでビザンチン軍が撃破されます。636年です。そこで撃破されたビザンチン帝国はシリア、メソポタミア、エジプト、北アフリカの領土を次々とムスリムの軍に奪われていきます。蛮人の侵略に対する反応として書かれたのが、プセウド・メソディウスの「黙示録」と呼ばれる預言書です。アラブのキリスト教徒から見れば蛮行になるわけですが、「アラブの蛮行は真の信者と背教者を振り分けるための神様の一時的な懲罰であり、ギリシャ王国の創始者アレクサンドロスの再来である最後のビザンチン皇帝はきつとアラブを倒してくれて、キリスト教の支配を打ち立て、キリストの再臨の際に地上の王権を神に差し出すであろう」という内容の預言です。7世紀のキリスト教徒たちは「この世の終わりが近づいている」という切迫感にかられていたわけです。こういうキリスト教徒たちがアレクサンドロスの再来である最後の皇帝、最後のキリスト教皇帝がもたらすキリスト教王国の勝利を、この預言に期待したわけです。ただ期待は破られてしまいます。

アレクサンドロスが二本角、ズー・ル＝カルナインなる下地は、すでに一神教によって敷かれていたわけです。イスラーム教はユダヤ、キリスト教の英雄、神の加護のもとに真の教えを広めるために西から東まで旅をし、この世の終わりに破壊をもたらす野蛮な民族が、神の意思に反して終末の時より早く暴れ出さないように封じ込める役割を担った勇者として象られた二本角アレクサンドロス、イスラーム教の宗教説話の中に採り入れたのであります。『コーラン』の中に入る過程で、アレクサンドロスという名前は完全に省かれてしまいます。名前が省かれたことによってアレクサンドロスという名前にまつわる歴史的なコンテキストも脱ぎ捨てられてしまうわけです。その背景には純粋に教訓的な目的があっただけではなく、相手のコマ、イスラーム教徒からすればライバルであるキリスト教とユダヤ教のコマを逆手に利用して、自らの宗教の優越性を宣伝しようというムリズムの政治的な意図もおそらくあったのではないかと想像できます。

後半は具体的な二本角アレクサンドロスが登場する文献の例を紹介して、神聖化されたアレクサンドロスのイメージを追います。『コーラン』の二本角説話の典拠、その人物についての啓示が下った理由は何であったにしろ、注目したいのはアレクサンドロスに関する伝説が『コーラン』の中に採り入れられたことによってアレクサンドロス伝承がイスラーム化されたことです。『コーラン』ではアレクサンドロスの名前は完全に二本角に置き換えられています。タバリーの『コーラン』注釈書の伝承に見るように、二本角とアレクサンドロスとの関係は完全に忘れられることはありませんでした。言い換えれば二本角という抽象的かつ寓意的な人物の正体を突き止めようとする解釈学者たちによって、その歴史性、時間軸上の存在を証明しようという行動は抑えがたいものであったようです。このため二本角とアレクサンドロスというのは切っても切れない関係になりました。

『コーラン』の二本角との結びつきはイスラーム世

界においてアレクサンドロスに神聖な側面を加えたのです。それは宗教書に限らず、歴史書、文学作品にも見られます。聖なる王アレクサンドロスのイメージがイスラーム世界の文学においてどのように展開したかを、タバリーの『コーラン』注釈書、サアラビーという人の「預言者伝承」、ベルシャの詩人のアレクサンドロスの書を通してご紹介します。タバリーの『タフシール』、『コーラン』注釈書ですが、注釈書は9世紀頃から数多く記され、『コーラン』の意味の説明だけではなく、内容にかかわる付加情報や、『コーラン』にまつわる伝承が集められたものです。中もタバリーの『タフシール』はイスラームが起こってから最初の3世紀の間に流布した伝承を豊富に集めています。タバリーが記している二本角に関する伝承の中でもアレクサンドロスとの結びつきが明白なものを二つ上げます。ムハンマドの教友のウクバの証言に基づく伝承の続きです。啓典の民がムハンマドに二本角について尋ねてきた経緯について上げましたが、その続きによると、ムハンマドの答えは、こういうものでした。

「彼はルームの若者で、エジプトに来てアレクサンドリアの町を建てた。建設が完成すると天使が彼のもとに現れ、彼をつれて天に昇った。天使が『何か見えるか』と言うと、彼は答えた。『我が町とその他の町々が見えます』。天使は高く上り尋ねた。『何か見えるか』『我が町が見えます』。さらに上昇し尋ねた。『何か見えるか』『地界が見えます』。天使は言った。『それぞ、この世を取り巻く大洋、アッラーが我を汝のもとに遣わされたのは、汝が無知なるものを教化し、知徳あるものを強固にするため』。それから天使はあらゆるものが終末の時に、そこから抜け出ていく柔らかい二つの山の壁に彼をつれていった。そこから進み、ヤーजूージュとマーजूージュを通りすぎた。さらに進み、犬顔をした民族を通りすぎた。それらはヤーजूージュとマーजूージュと戦っていた。さらに先に行くくと犬顔の民と戦っている別の民族に行き手を塞がれた。それ

を去ってその名をすでに上げたまた別の民族に向かっていった」。ここで途切れる感じで伝承は終わってしまいます。

この一節自体にアレクサンドロスという名前は記されていませんが、「ルームの若者で、エジプトに来てアレクサンドリアを建てた」というのはアレクサンドロスのことしか考えられません。この伝承によるアレクサンドロスはアレクサンドリアを建設した後に、天使に導かれて町の上にとんとん昇っていく。三段階の高さから地上を見よと言われ、そのたびに天使に「何が見えるか」と尋ねられます。最後に高いところに昇って、全世界とそれを取り巻く海が視野に入るほどの高さに到達したところで天使に布教の教えを広める使命を告げられ、その後、「こういう場所に神の教えを広めなさい」というところまでつれていかれるわけです。

中世ヨーロッパにもアレクサンドロスの昇天の話が流布していました。今のウクバの伝承とはちょっと内容が違います。アレクサンドロス物語はベータ系、ガンマ系という系統からヨーロッパのいろいろな言葉に訳されていて、広がっていきましたが、教会建築の装飾のモチーフとしてもヨーロッパ各地で使われました。オトラントというイタリアの踵の先にある大聖堂の教会全体に床モザイクが施されていて、入り口近くにアレクサンドロスがいます。アレクサンドロスが四羽の鷲、またはグリフィンに結び付けた籠に乗って、先に肉の固まりがついた棒を持っている。肉の固まりをグリフィンの鼻先に掲げて、それを餌に「とんとん上に上がれ」と天まで昇っていくという話が描かれています。蛇は海を象徴していますが、海に取り囲まれた世界が円のように見える高さまで昇ったところで、天からの声、天使に「なんでお前はこんなところまで来たのか」と怒られて、また地上に戻ってくる。そういう話です。

海に取り囲まれた地界のビジョン、天使が登場するという点はイスラーム教の伝承と共通するのですが、アレクサンドロスは自らの意思によって珍妙

な飛行装置を考案して天に昇るのではなく、神の使いに導かれていきます。中世キリスト教世界ではこのエピソードを天界をも征服しようとするアレクサンドロスの傲慢と野望の表れであると批判的に解釈する傾向が強く、モザイクにしても信者の人が教会に入って踏んづける部分に施されています。無謀な野望は「敬虔な気持ちで教会に入りなさい」という踏んづけられる部分にあるわけです。

タバリーが挙げているアラビア語の伝承においては、アレクサンドロスは神様の命令に対して完全に受動的であって、彼自身の野心、攻撃心は全く表れていません。彼は神様に選ばれた人間として神の力を持って奇跡的に浮上し、全世界を見せられ「無知なるものを教化し、知徳あるものを強固にする」という布教の使命を明かされています。野望ではなく、預言者ムハンマドの昇天、ミラーージュにも通じる啓示的な空中飛行なわけです。ユダヤ教徒の間でもアレクサンドロスの昇天は伝説として古くから伝わっていたようで、エルサレム・タルムードの中にはラビ・ヨナという4世紀の人の言葉として、こんなことが書かれています。「マケドニアのアレクサンドロスは天に昇ろうと望んだ際にとんとん高く上がり、遂にこの世が球のように見え、海が大皿のように見えるところまで達した。これゆえに彼の肖像は球を手をしているのである。なぜ皿を持っていないかという、彼でさえ海までは征服できなかったからである。聖なるもの(神)、彼に幸あれ、聖なるものは海をも陸をも支配しておられる」。これはユダヤ教徒のアレクサンドロス昇天伝承です。タルムードに含まれているこの一節はタバリーを引用しているウクバの伝承と直接かかわりはないかもしれませんが、アレクサンドロスが天高く昇って、眼下に見下ろすと、世界とそれを取り巻く海が見えるという点ではタバリーの記述と共通しています。しかしこのユダヤ教徒の伝承において、アレクサンドロスは天使の助けを借りたのではなく、自ら望んで天に昇っていきました。アレクサンドロスは天に昇ろうと望んだ。そのためにどのような方法

を用いたかは記されておりません。キリスト教伝承にあったようなグリフィンを使ってということはここには書いてありません。

一部のキリスト教の解釈ほどアレクサンドロスの傲慢を否定的にとらえているわけではありませんが、しかしこの逸話の趣意は明らかに「アレクサンドロスほどの征服王にも力の限界があって、神の全能には及ばない。聖なるものは海をも陸をも支配しておられる。しかしアレクサンドロスは海までは征服できなかった」という、アレクサンドロスですら神の全能には及ばないということを示すエピソードであります。

このようにキリスト教徒、ユダヤ教徒のアレクサンドロス昇天伝説と比べてみると、イスラーム教、ムスリムの伝承のアレクサンドロス伝承のみが、自らの野望、傲慢、好奇心によるのではなく、神様に選ばれた人間として天使に導かれて天に昇っています。眼下に見える全世界の布教の任務を啓示されています。アレクサンドロスを神に対抗しようとする無謀な王様ではなく、真の教えをあまねく広める使命を担った神の従僕とするムスリムの伝説の展開は、アレクサンドロスが『コーラン』の二本角と同一視され、神聖化されていた独自のものであったと言えます。

さらに、ワフブ・イブン・ムナンビフに遡る伝承をタバリーの『タフシール』からの引用します。これによると、二本角はルームの若者で、ある老婆の息子であった。名前はアル・イスカンドルであった。二本角が青年に達した時、神様が直接彼のところに来る。お前を世界の人々のもとに遣わす。「こういう人々がいるが、お前を遣わす」と二本角に言います。神様と直接対話しているわけです。神がこのように言われると二本角はこう答えた。「神よ、御身以外に匹敵するものがないほど偉大な権威を私にお与えくださり、また私をそのもとに遣わされる民について知識をお与えくださった。しかしこんな小さな私がどんな力を持ってそれを果たすことができましょう。いかなる力を持って彼らに勝ることができましょう。いかなほどの人員を持って、いかなる策略を持

って・・・」というように、「いかなる」「いかにほど」という畳みかけによって、しつこいほどに神様に問いかけているわけです。その問いかけに対して神様は「大丈夫。汝に負わせた重荷に堪えられるようにしてしんぜよう。まずは汝の心を開き、すべてを受け入れられるようにしてやろう。また汝の知性を開き、すべてを解することができるようにしてやろう」。言葉だっただけでわかるようにしてあげるから大丈夫だと神様が二本角に言うわけです。「光と闇を汝に従えさせ、汝の軍隊の兵士を、光は前方で汝を導き、闇は背後から汝を守るであろう」。神様が大丈夫だと二本角に言います。

このように神様から力をもらって、二本角はある日、日の沈むところの人々のもとに行きます。そこで教えを広める戦いをするわけですが、教えを受け入れた者には何もしないのですが、「教えに背を向けた者たちに近づいて、暗闇を彼らの体内に送り込んだ。そして彼らの家や建物に侵入し、上下四方からも彼らに覆い被さり、波のように押し寄せ、彼らは動揺した。暗闇の中で死ぬことを恐れ、彼らは声を合わせて叫んだ。二本角がそれを取り払い、彼らを力づくで押えと、彼らは二本角の布教の旅に加わった。二本角は西方の人々の間から有志を募り、軍隊を編成し、彼らを率いて進発した。暗闇は彼らを背後から駆り立て回りから彼らを見守った。光は先頭で彼らを率い、導いた」。暗闇が目や口の中から入って、膨脹して圧迫されそうになる。強迫観念を想起させるような伝承です。

これは物語的で、伝承としては長いのですが、三つの部分からなっています。二本角がアレクサンドロスであること。二本角と神様の対話の話、彼が世界の隅々で繰り広げる聖戦の様子。この続きにヤーजूージュとマージュージュが、どんなにへんな民族かという説明がありまして、その次に「猛獣の如く家畜や野獣を殺したり、雄と雌の身の丈が普通の人間の半分で指の爪の代わりに鍵爪が生え

ていて」「身体中毛に覆われていて、耳が大きくて、耳の表裏に毛がびっしり生えていて」というような野蛮で奇妙な民族の様子が描かれています。その奇態に関する説明の後で、二本角が彼らを封じ込めるための壁の建設の様子が描かれています。山の間の距離を計って、そこに石を埋めて、溶けた銅を流しこんで、という具体的な描写があります。

壁の建設が終わった後、「敬虔で公正な民」と出会います。その民と問答します。非常に平和に暮らしている人々で、墓が家の門口にある。「それはなぜか」と二本角が尋ね「我らがそのことをするのは死者のことを忘れず、その記憶を心の中から消し去らないためです」。家に扉がない。「なぜか」「我らの中にはあやしげな人物は一人もおらず、お互いに信頼しきっているからであります」「支配者がいないのはなぜか」「我ら互いを虐げるようなことはしないからです」。平和な理想郷のような町で暮らしている人々に「どうしてこういうことかできるんだ」と二本角が問答をする一節があって長い伝承は終わります。この伝承の一部はアレクサンドロス物語に関連します。ゴクとマゴグに関するところ。敬虔で公正な人々との問答は、その起源をたどれば、もともとアレクサンドロスがインドに遠征に行った際の、インドの裸の哲人ブラフマンとの問答がもとになっています。ブラフマンはギリシャ語ではギムノソフィスタエと言い、アレクサンドロスはこの人に直接会っていないのですが、アレクサンドロスの部下が会いにいった問答をしたということが、すでにギリシャの歴史書に入っています。それがアレクサンドロス物語のアルファ系にも入ってきています。ユダヤのアレクサンドロス伝承にも、アレクサンドロスと南の賢者たちとの問答が存在します。

この伝承を見直しますと、神がアレクサンドロスに直接使命を明かして、さまざまな力を与えて光と闇の部隊を聖戦に加えさせている。これにはシリア語のキリスト教伝説との結びつきが考えられます。シリア語のキリスト教伝説には神様がペルシャ

王との対戦を前にしたアレクサンドロスの夢の中に現れて、神の助力を求めようと直接、語りかけ、戦いの場面において彼の軍を援助するという一節があります。しかしシリア語では神が敵に囲まれたアレクサンドロスの助けに現れるのであって、タバリーにあるように神自身がアレクサンドロスを聖戦の闘士として全世界に遣わすわけではありません。

この伝承の特徴的な点はアル・イスカンドルという名前と、彼がルーム人であったこと以外、歴史的、地理的具体性が全くないということです。この伝承に表れている世界像は図式化され、簡略化されていて実際の地名はルーム以外に一つも出てきません。縦と横に分割された世界を、二本角はまず日の沈むところから地上の右肩に回って、そこから日の昇るところに向かい、さらに地上の左肩に行き、風見鶏の針がぐるりと回るように回って世界の中心へと進んでいきます。唯一実在の地域を示しているとされる、東方のトルコ人の土地が出てきますが、漠然としていて特定の地名とは結びつきません。登場する人物もペルシャ王、インドの哲人とも書いておらず、タバリーの方は、ナーシクとマンサク、ハーウィルとターウィル、ヤーजूージュとマージュージュというような対になった名前が同語根であるような韻を踏むような3組の空想的民族や名前を持たない敬虔な民しか登場しません。

この伝承を伝えたワフブ・イブン・ムナンビフは654年～732年の人ですが、彼はユダヤ・キリスト教の伝承を多く伝えたことで知られています。ユダヤ・キリスト教徒にも馴染みのあったであろうアレクサンドロス伝承は、あるいはイスラーム教への改宗を促す説話として語られていたのかもしれませんが。象徴性、寓意性が前面に打ち出されているのは宗教説話ならではの特徴であると思います。暗闇がアッラーの教えを拒否した者たちの目、鼻、口から身体の中に入っていった膨れ上がってという、家の中にも入って押しつぶしにかかるというような下りは、信仰を受け入れないものたちへ恐怖の念を喚

起させる効果があったと考えられます。

タバリーの『コーラン』注釈書の中からアレクサンドロスと深くかかわっている伝承を二つ上げましたが、いずれもユダヤ・キリスト教徒のアレクサンドロス伝説の影響が見え隠れします。イスラーム教的なコンテキストにおいて語られたアレクサンドロス伝承は比較の対象として上げたユダヤのタルムードやキリスト教伝説の中の類似の逸話に比べると、全世界に教えを広める神の使徒としてのアレクサンドロスの役割が、イスラーム教の伝承の方では、より強調されています。二本角のアレクサンドロスは、まず神から啓示を受けて神の命にしたがって布教の旅に出る。自分から行くわけではない。世界征服者としての野心や好奇心は全くここでは表れていません。二本角と同一視されたアレクサンドロスは、ここでは真の意味でのムスリム、神に絶対的に服従するものとして描かれていると言えましょう。

サアラビーの「預言者伝集」について。彼は1035年に没した作家で、預言者伝集は西洋で言えば、聖者伝のジャンルですが、預言者伝承にはいろいろな作品があって、その頂点とされる作品を書いた人です。サアラビーの預言者伝承の中にアレクサンドロス二本角が入っています。タバリーのは断片的伝承の寄せ集めで、具体的な地名が登場しない、寓意性と象徴性が強調された二本角伝承ですが、サアラビーは歴史書、地理書からの情報も引いています。それをうまく一貫して誕生から死に至るまで起承転結、二本角アレクサンドロスの一生という感じの伝記風に時間軸に並べ、一貫した物語をつくっています。歴史書、地理書からの情報を引いているので、タバリーに見られたような完全に神に身を委ねる従僕というアレクサンドロスの像もありますが、そこにはアレクサンドロスの野望も備えた二本角というイメージも表れてきます。二本角アレクサンドロスというのは「布教者及び信仰の擁護者」だけでなく「欲心と傲慢に対する訓戒」としての役割も果たしていると言えます。

ニザーミーというペルシャの大詩人は1141年～1209年まで生きた人ですが、5部作の作品を残しています。そのうちの一つがアレクサンドロスの章「イスカンダル・ナーメ」というものです。1196年以降に書かれたとされています。2巻に分かれていて、1巻目が「栄誉の書」、シャラフ・ナーメ、2巻が「幸運の書」、イクバル・ナーメ。この書の中で、アレクサンドロスは神の敬虔な信徒及び布教者であるのみならず、預言者の境地まで成長していくわけです。1巻はアレクサンドロスが、エジプト、イラン、アラブ、インド、中国、ロシアに遠征していき、北方の闇の国まで至った後に、祖国のルーム、ギリシャに帰ります。1巻は征服者としてのアレクサンドロス。2巻の幸運の書では、ルームのギリシャの宮廷に哲学者たちを集めて問答を繰り広げる哲人王として登場します。そこに天使が来て、神の啓示を与えます。「布教の旅に出る」と。そこから預言者として再び旅に出る。征服者から哲学者へ、そして預言者へと三段階の成長を遂げています。

詩人自身が意識してつくったことが「序」によってわかります。「誰の助けもない。脅威に満ちた場所で名高い勇士の名の上に賽を投げた」。何について書こうかと悩んでいる時に、歴史上の偉大な人について書きたいが、誰について書こうかと考えます。「勇士たちの名の上に賽を投げた。その思いであらゆる鏡を磨くと、その奥にアレクサンドロスの原像を見いだした。ある者は彼を玉座の主と呼び、諸国の征服者、地平線の掌握者とも呼んだ。またある者は彼の模倣的な統治から彼に賢人の称号を与えた。さらにある者は彼の清浄心と信仰の擁護から彼を預言者と認めた。私はこの三つの種から一本の青々と繁る木を育てよう」。詩人としての意気込みをここで語っています。三部構成、三段階の成長過程というのは、アラブの著名な哲学者でアル・ファーラービーという人がいて、彼が「理想都市論」を書いています。この影響ではないかと言われています。ファーラービーによると「理想的な君主は

優れた哲学者であり、預言者であり、雄弁家であり、教育者であり、律法者であり、軍の指揮者としての六つの特質を備えるべきだ」と書いています。ニザーミーはファーラービーが抽象的な概念として論じている君主像をアレクサンドロスの作品において具体的に描こうとしています。

三部構成の第一段階における征服者としてのアレクサンドロスは単に野望にかられて諸国を攻略するのではなく、信仰心に動かされた布教者として描かれています。たとえばペルシャ王ダレイオスとの戦いで、臣民をダレイオスの暴政から解放するためではなく、ゾロアスター教というイスラーム教から見れば邪教をイランから取り除いて、アブラハムの教え、イスラーム教の起源である正しい教えを確立させるための聖戦と描かれています。ダレイオスを倒してイランの王座を手に入れたアレクサンドロスは神の信徒としてイラン中の拝火殿を破壊していきます。拝火教の撲滅の場面です。マジは拝火教の聖職者ですが、「マジの服を火にくべ、拝火殿に厳しい処置をとるように。そこに蓄えられていた財産も皆に分け与えた」。そういう描写があります。ニザーミーのアレクサンドロスの章は別の前の詩人、フィルドゥスィーという人が書いた「王書」、シャーナーメに含まれているアレクサンドロスの話を種本としてとされていますが、それを書き換えて独自の物語をつくりあげています。フィルドゥスィーの『王書』において、アレクサンドロスは拝火教に対して寛大な扱いをします。その部分ではフィルドゥスィーはイラン的、ゾロアスター教的な特徴を残している作品として書かれています。それがニザーミーの手にかかる修正されているわけです。イスラーム的観点からとらえ直して布教のための正統な行為であるととらえています。

ニザーミーの中のメッカの巡礼もアレクサンドロスを敬虔な信徒であったと強調しています。メッカのカーバ神殿に行って、しきたりにしたがって回って財宝を与えたりして巡礼をします。アレクサンドロス

の信仰心の篤さを強調しています。信仰が篤いムスリムであるだけでなく、三段階の最後の部分では遂に預言者の境地に達します。預言者になる際の天使の啓示、預言の旅に出るきっかけの部分ですが、読んでいくとタバリーの神様との対話の伝承をもとにしているのだらうとわかるのですが、ニザーミーにおいては天使が「主の意図を万物に知らしめるのだ」という使命を与えます。これがアレクサンドロスの答えです。「神様がそうおっしゃったのであれば、布教の旅に出ましょう。しかしあらゆる国々の領主になりても、その国の言葉を知らずに何と言おう。これほど多くの民族に挑むのに、荒れ野や山をいかに行軍しよう」。これもタバリーの神様との対話に出できた「どうやって」「いかなる」「いかにどの」という神様に対する問いかけを踏襲しているのですが、アラビア語の伝承の畳みかけるような問いかけ、うろたえた若者が「自分は無力なんです」と言う若者の神様に対する問いかけが薄らいではいます。ただの人間の無力さと神の全能の対照がアラビア語の伝承にはありましたが、すでに偉大な王様になったアレクサンドロスになったところに天使が来るわけですから、物語の中に組み込まれた分、啓示のインパクトがちょっと薄らいでしまっていることはあります。これが天使の答えです。「それは大丈夫だ。汝か望むところ、どこでも光と闇が従おう。汝が出会う、どの民も異国語を話すであろう。だが汝を導く助力者の神感であらゆる国語を口にすることができるであろう。汝がルーム語、ギリシャの言葉で話しかけても聞き手は通訳なしで解することができるであろう」と。これもタバリーに出てきた伝承に基づいていると思います。物語の中に組み込まれているわけです。

ニザーミーの作品における「アレクサンドロスの征服者としての遠征」と「預言者としての旅」の大きな違いは何か。最初は征服者として、二巻目としては預言者として布教の旅に出る。二つの旅に違いがあります。後者の部分、預言者としての旅の部分は、

戦闘や破壊の場面がほとんどありません。野蛮な風習を持った民族のもとに行くのですが、その民族の話聞いた上で「自らの慣習と規範を彼らに教えて自らの信仰を持って彼らの知の光を灯した」と。暴力によって押しつけるのではなく、話し合うことによって、例えば中国に行った時には中国の皇帝と話し合うことによって皇帝を改宗させます。いろんな民を改宗させて最後に出会うのが、タバリーの伝承に出てきた「敬虔な人々」です。敬虔な人々は家や店には鍵もついていない、番人もいない。おおらかに暮らしている。嘘もつかない、不自由なものも助けて、他人の不幸を喜ばず、罪はせず。公正な敬虔な人々に出会うわけです。この理想郷に人間の共同体のあるべき姿を見たアレクサンドロスは、信仰深い人々に神の教えを伝える必要がないことを認めます。「これぞ人の道なら、我らは一団、何にならってきたのか。人間とはかくべきあるなら、一団我らは何者なのか。我らを海や野に神様が向かわせたのは、この地へたどりつかせるため」。地球の隅から隅まで旅をして遭遇してきた民族は武力の上においても、信仰の点においても、アレクサンドロス抜きでたものはいなくて、今までの民族は二本角に服従してきた。アレクサンドロスはこの町の人々の生き方を見て、初めて自らの劣勢を認めて恐れ入ります。彼を預言者として選んで神様が世に送り出したその意図は「正しい教えを地上に広めさせるためではなく、実はアレクサンドロス自身の限界を悟らせるためであった」ということに気がつきます。

タバリーの解釈書においても、二本角のアレクサンドロスは公正で穏健な人々に出会って、その人々の様子を見て驚いて質問を投げかけます。問答の意味合いは伝承が途切れてしまうので、特に解説されていないわけです。この点においてもニザーミーは物語全体の中に流れの中に巧みに組み込んで、征服者としても預言者としても地上の隅々まで征したはずのアレクサンドロスが、理想郷に来

て初めて自分と対等、もしくは自分より優れた人々と出会って神の崇高の意思と自らの限界を悟るといふ展開になっているわけです。そういうふうになり込むことによってニザーミーは、この話の教訓的な意味合いをより強調しています。ニザーミーはフィールドウスイーの「王書」、タバリーの『コーラン』注釈書などさまざまな材料を使っているが、継ぎ接ぎにするだけでなく、物語の構成要素として解釈し直してイスラーム的英雄としてのアレクサンドロスをつくりあげているわけです。

ユダヤ教徒はアレクサンドロスに神の国を地上にもたらすメシア(救世主)を見ました。キリスト教徒はアレクサンドロスをイエス・キリストの先駆者、最後のビザンチン皇帝の先駆者とみなしました。このようにユダヤ・キリスト教徒たちによってすでに神聖視されたアレクサンドロスをイスラーム教は自らの宗教の擁護者、布教者、預言者二本角として受け入れたのであります。ただし先行する一神教とイスラーム教が大きく異なる点は、イスラーム教徒たちは実際にアレクサンドロスが征服した地域と大部分が重なる巨大な帝国の支配者となったということです。ユダヤ教徒、キリスト教徒はそこまでアレクサンドロスの帝国と重なるほどの地域は征服していないわけです。

二本角アレクサンドロスは救世主的な、いつか来る理想時代の神の国の君主ではなく、ムハンマドやその仲間たちの現実のモデルとなりえた世界征服者の原型であります。初期のムスリムたちは東奔西走し、神の教えを広める二本角の天命を自らの聖なる戦いに重ねて見る事ができたわけです。逆に言えばアレクサンドロスという歴史的人物、それにまつわる伝説が内包する戦闘的な側面がイスラーム後期の聖戦のコンテキストにうまくあてはまったと言えましょう。しかし二本角アレクサンドロスは攻撃的なだけではありません。ヤーजूージュとマーजूージュ、ゴグとマゴクの侵攻を防ぐ壁を建造する話が二本角にまつわるエピソードとして『コーラ

ン』をはじめとするさまざまなテキストに含まれていることからわかるように、信者共同体を外敵から守る守護者としての役割も重要でした。こうしてイスラーム教を広め、それを守るための力を神に与えられた二本角アレクサンドロスですが、そのあくなき野心というものは、ムスリムによって教訓の対象とされずにはいられませんでした。

アレクサンドロスが、永遠の命を得るために生命の泉を暗闇の国に探しにいった、見つけ損なって帰ってくるというエピソードも、アラビア語やペルシャ語の文献によく出てきます。生命の泉を発見することに失敗して早死にをした。それは人間が免れない死を拒むおこがましさにに対する警告として教訓的なメッセージとして読めます。アレクサンドロスという人物を野望の象徴として見なすのはイスラーム教独自の解釈ではありませんが、この点に関して、中世ヨーロッパのキリスト教の神学者たちほど批判

的ではないようにも思われます。キリスト教の否定的なアレクサンドロス観は、彼の無謀な天空飛行のエピソードに基づいているのに対して、二本角の昇天は神に導かれた啓示とされていました。

さらにもう一つ指摘したい重要な点は、『コーラン』の二本角においてはアレクサンドロスにまつわる歴史的な文脈は完全に脱ぎ捨てられていたかのように見えました。しかしサアラビーの預言者伝集では、アレクサンドロスに関する年代期的な情報、歴史的な情報を積極的に採り入れていました。ニザーミーのアレクサンドロス物語もその両方の要素、教訓的、寓意的な伝承の部分と、歴史的な部分を叙事詩の中で十分に展開させていました。『コーラン』以降の宗教文学においても、文学作品においても、神聖視された二本角と、歴史的人物であるアレクサンドロスは常に切っても切れない密接な関係にあったということです。

「二本角が表すもの—西アジアにおけるアレクサンドロス大王の神聖化」

国立民族学博物館 山中由里子

講演レジュメ

- 1 二本角のアレクサンドロス
 - 1.1 『コーラン』第18章「洞窟」82—97節
 - 1.2 「二本角」の正体
 - 1.3 一神教とアレクサンドロス
- 2 アレクサンドロスの神聖化
 - 2.1 タバリー(923没)の『タフシール』(コーラン注釈書)
 - 2.2 サアラビー(1035没)の預言者伝集
 - 2.3 ニザーミー(1141-1209)のアレクサンドロス物語

参考文献

山中由里子「アラブ・ペルシア文学におけるアレクサンドロス大王の神聖化」『国立民族学博物館研究報告』27巻3号, 2003年, 395—481.

公開講演会

何のための対話か？ —オランダにおけるキリスト者とユダヤ人—

日 時:2006年1月14日(土) 14:00—16:00
 会 場:同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂
 講 師:エリック・オッテンハイム(コトレヒト大学神学博士)
 コメント:ミシェル・モール(同志社大学嘱託講師)
 司 会:石川 立(同志社大学大学院神学研究科教授)
 共 催:一神教学際研究センター、同志社大学神学部・神学研究科

講演要旨

オッテンハイム氏は、ユダヤ教に対してキリスト教がどのような態度をとってきたかを、オランダの豊富な事例を踏まえつつ歴史的に紹介した。まず氏は、講演を語る上での前提として自分がカトリックのキリスト教徒であることを明らかにし、グローバル世界での宗教間対話の目的と方法、危険性と可能性について言及した。講演の前半では、1948年以前のオランダにおいて、ユダヤ人に対するキリスト者の態度が紹介された。これは主に二つに分けられる。①1945年4月、大戦中のオランダで、ある一部のキリスト者は反ユダヤ主義への抵抗とユダヤ人の具体的な救済を試みていた。この動きの背景には、ユダヤ人が終末において神に対する特別な役割を担っているというユダヤ人の認識があった。これは主に19世紀のプロテスタント・サークル(イサック・ダコスタとアブラハム・カバドーズ)の中で育まれたものである。②1948年以前のカトリシズムとプロテスタント改革派において当時支配的であったのは、現存のユダヤ教は神の恵みから排斥されているという見解であった。民族的な反ユダヤ主義には反対しつつも理念的にはこれを正当化したカトリックは、自らの社会的アイデンティティの純粋性を保持するために必要な教義としてこの見解を維持していた。この一見異なる①と②の主張に共通していることは「置換の神学」にルーツを有している点にある。つまり、1948年以前のキリスト教は、神の聖なる約束がすでにユダヤ人からキリスト教へ移されているという認識においては変わらなかったのである。

公演の後半では、氏はまず第二ヴァチカン公会議でのユダヤ教に対するキリスト教の公式の声明に言及した。この声明では、イエス・キリストの処刑にユダヤ人は責任を持たず、彼らにとってアブラハムの約束は廃棄されていないという画期的な宣言がなされる。しかし氏は、この宣言も「何を言ってはいけないか」を言うにとどまり、「何を語るべきか」については十分に言及されておらず、カトリック神学全般から見ればまだ不十分であることを指摘した。また、氏は近年のオランダの事例としてプロテスタント教会で用いられている「聖金曜日の祈り」についての論争の一端を紹介した。この論争は「キリストの受難」と「解放された教会」を扱ったこの祈りの文言が反ユダヤ的であるという批判から始まったものであり、実践的な宗教行為の現場で両宗教の関係を単純に結論づけることができず、同時に